

日本地衣学会

No.149

ニュースレター

Newsletter from the Japanese Society for Lichenology

目次 会員通信	557
ヤスデゴケモドキ雑記/吉村 庸	557

会員通信 From Members

ヤスデゴケモドキ雑記

Miscellaneous Notes on Phylliscum japonicum / by YOSHIMURA Isao

>>>>>> 吉村 庸：服部植物研究所高知分室

今年の日本地衣学会の年次大会は高知で開催されましたが、その折に千葉の博物館の原田 浩さんが見えられ、佐川町の虚空蔵山に調査に行くとの話から、ヤスデゴケモドキの話に移った。

上村 登先生がかつて、虚空蔵山の頂上付近の岩上で、苔類のヤスデゴケを見つけ手を伸ばして採ったところ、全く感触の違う硬い地衣類の珍品であった。調べたところ、欧州では高山の岩上に稀に見つかる *Phylliscum demangeonii* (Moug. & Mont.) Nyl. に近縁の種類で、日本産の種類は *P. japonicum* Zahlbr. と判明したが、和名がなかったので、上村先生がこの時に苔類のヤスデゴケ *Frullania* spp. (アカヤスデゴケ、サカワヤスデゴケ等) と見間違えたことに因んで、ヤスデゴケモドキと名前を付けた。このくだりは上村(1944)に詳しく書かれている。

後に上村 登先生は苔類の日本産ヤスデゴケ属苔類の分類をまとめられて、東京文理科大学より理学博士の学位を授与された(主査：伊藤 洋教授)。なお、こ

のエピソードを上村 登先生は自著『土佐の植物』(上村 1944)に記述し、出版された。これは戦中に出版された数少ない児童・生徒対象の啓蒙書であるが、植物一般について、郷土にある身近な植物を取り上げ、興味深く記述した好著で広く県内外で読まれたものである。このなかに、地衣類を始め小さなコケやキノコ、海藻や淡水藻についての記述もあり、多くの篤学者によって読まれた。

土佐の植物は、土佐の生んだ牧野 富太郎、吉永 虎馬両先生によって調べられているが、吉永先生は高等植物の他、菌類、苔類など広範囲に研究対象を求められた。ヤスデゴケモドキが初めて新種として発表されるに至ったきっかけは、吉永先生が土佐の筒上山で採集されたのを当時東京大学の薬学、特に地衣類などの天然物化学の権威であった朝比奈泰彦先生により他の種類の標本とともに、ウィーンの博物館館長を勤めていた Zahlbruckner の下に送られたことであった。その鑑定(同定ともいう)結果は、Zahlbruckner (1927)

によって当時の植物学雑誌に *Phyllicum japonicum* Zahlbruckner と学名を与えられて発表された。

この原記載論文においてはもちろんだが、この地衣に当初は和名が付けられることが無かった。その後、上村先生（1944）により付けられた和名ヤステゴケモドキがそのまま広まり、通用するようになっていった。

私が植物に興味を持ち始めた中学 2 年生の頃、貪欲にいろいろな植物の書物を読んでいた。『土佐の植物』（上村 1944）は特に興味を引いた書物であった。戦後間もない当時には一般の植物の本もまだ市販されておらず、県立図書館や学校図書館は私にとって最大の情報源であった。この中で、『土佐の植物』は燦然と輝く至宝のような存在で、実際に入手したのは、随分と後になり、植物の古本で有名な東京の井上書店からであった。昭和 19 年といえば、日本は戦争の真只中にあり、物資の不足に悩まされており、印刷のための紙の配給がなかなか受けられない時代であり、『土佐の植物』も粗末なわら半紙のような用紙に印刷されており、装丁も十分ではなく、私の所蔵本も分解寸前の状態である。

因みに、動植物に和名をつけるというのは苦勞の多いものである。学名でも苦勞するが、和名の場合は違った意味で苦勞する。一番困ったのは、『原色日本地衣植物図鑑』（吉村 1974）を執筆した時である。地

衣類は一般に学名で区別しており、和名の用意はできていない。出版社の要請で急遽和名を付けるようになった。和名のほうが親しみやすく感じられるからであろう。粗製乱造でもなんでも、とにかく作らねばならない。似たような小さなコケに他の種類と区別できるような名前を付ける。簡単なようでなかなか難しい。凶鑑の場合は一斉に多くの種類に和名を付けることが多い。それにしても明治・大正のころの研究者の付けた名前には実に味のあるのが多い。ハクテングケなどは地衣体表面に盃点や偽杯点のあるグループに付けたウメノキゴケ科の地衣類の和名である。これに対して、安田 篤先生は「シラホシゴケ」という和名を与えている。夏の夜、晴天の星空を見るような情景である。すばらしいと思う。とても真似はできない。泥臭い名でも無いよりは良い。私はこうして泥臭い作業を進め、和名の大量生産をした。しかし、だんだん研究が一段落すると、和名もより適切なものに変更するようにと、心がけている。因みに和名には学名のような先取権はない。みんなが良いと感じるものが広まるのが自然である。皆さんからも良い知恵を授けて頂きたい。

引用文献

- 上村 登. 1944. 土佐の植物. 252 pp. 照林堂, 東京.
吉村 庸. 1974. 原色日本地衣植物図鑑. 349 pp., 48 pls. 保育社, 大阪.
Zahlbruckner A. 1927. Additamenta ad licheno-graphium japoniae. Bot. Mag. Tokyo 41: 313-364.

●複製される方へ

本誌に掲載された著作物を複製したい方は、許諾を受けてください。詳細は本誌 102 号 378 ページに。

●Notice about photocopying

In order to photocopy any work from this publication, you or your organization must obtain permission. For details, see No. 102, p. 378 of this publication.

- *Newsletter from the Japanese Society for Lichenology*, no. 149, pp. 557-558: eds. Nakashima H., Bando M., Kawakami H. & Harada H., published by *the Japanese Society for Lichenology*, 26 Dec. 2017.

日本地衣学会ニュースレター 149号

発行日：2017年 12月 26日

編集：中嶋裕之・坂東誠・川上寛子・原田浩

発行者・発行所：日本地衣学会

〒658-8558神戸市東灘区本山北町4-19-1

神戸薬科大学 薬化学研究室

©2017日本地衣学会 (© 2017 The Japanese Society for Lichenology)

本誌記事の著作権は日本地衣学会に属します。無断転載・無断複製等は固くお断りいたします。